

歴史は語る

2010年12月15日発行 第2号 編集責任者 青田 勇

九州学院神学部時代 L.S.G.ミラー (後列左)



ミラー先生の思い出

内海 望 (引退教師)

L.S.G.ミラー先生は1908(明治41)年来日、戦争中の数年を除いて40年以上宣教師として働いて下さいました。そのうち30年を九州学院の牧師・

教師として熱心に生徒のために尽くされました。九州学院にとつて忘れ得ない方です。私は、先生の定年帰国までの3年余りを九州学院の生徒として薫陶を受けました。

当時、噂話がありました。それは、ミラー先生は出勤して来られると、おもむろにポケットから懐中時計を取り出し時間を確認し、それに事務室の柱時計を合わせているというものでした。真偽のほどは分かりませんが、これはミラー先生の謹厳な姿を合わせ考えると、何かぴたりする話です。彫りの深い顔、きちんとした身なり、その行動、まさに意志を曲げることのない重厚な人柄を思い出させる逸話です。しかし、ほほ笑まれる時は、本当に暖かい笑顔でした。私は、奥様ともども英語を習いましたが、教

え方は奥様がよりわかりやすかったという思い出があります。奥様は「懐かしのバージニア」というフォークソングをきれいな声で歌って下さいました。

しかし、何といつてもミラー先生の関心は伝道にありました。日曜日礼拝前に「モーニングウオッチ」と名づけられた集まりを自宅で開かれ、多くの生徒が集まって熱心に聖書を読み、信仰について学びました。ここから、古財克成、松本教義、内海革など多くの牧師が生まれ、また高名な魚類学者であり、神学大学などでも教鞭をとり教会のために尽くされた上野輝彌さんもそのメンバーです。その他、先生のもとから現在「慈愛園」理事長の労を取って下さっている柏尾誠之さんなど、戦後の教会を支えて来た多くの信徒が生まれました。ミラー先生を知る多くの方々と、九州教区を始め、全国の教会でお会いするのは、楽しいひとときです。

一人ひとりのことを念頭に思い描きながら祈るといふ「祈る姿勢」を改めて教えられた思い出です。

お別れする前に、ミラー家の墓地に案内して下さいました。そして、墓地の前で懐中時計を取り出し、「これはハイスクール時代に陸上で優勝した時にももらったものだ」とにっこりとされました。そのとき、あの学校での噂話を思い出しました。同時に、宣教師という仕事の重さも感じました。多感な青年時代に故郷を離れ、生涯を、全く未知の国で過ごすことの大変さです。これはひとへに福音を宣べ伝えようという情熱と、その国と人とを愛する情熱がなければ決して出来ない業です。

それにしても、夕日を前に立つミラー先生の姿に「誇り高きバージニアン」を感じさせられたひと時でした。今、改めて「ありがとうございました」と心からの感謝をささげます。

L.S.G.ミラーの略歴(日本来日以前)

出身 バージニア州
1881年8月23日、バージニア州セラムに生まれる。1888年3月にバージニア州のウィンチェスターに移る。後に、ウィンチェスターのルーテル教会は、九州学院及び宣教師ミラーの支援教会となる。
大学 バージニア州神学校、ペンシルベニア州バージニア州のローノーク大学を卒業した後、社会人としての経験を1年または2年してから、フィラデルフィア州のセント・エリーザベス神学校に入学した。
按手式 バージニア州
バプティスト・シノドの総会で按手礼を受ける。
補足：ミラーはサウスカロライナ州チャールストンにある南部神学校教授L.S.G.M.ミラー博士の御子息である。

九州学院「みどり幼稚園」の思い出

佐藤玲子（市ヶ谷教会員）

みどり幼稚園の種が蒔かれたのは、1924（大正13）年、宣教師グレイ夫妻の祈りによって始まりました。殊にグレイ夫人は幼児教育を通しての伝道に使命をもっていました。熊本市大江町に家を借り、一室を開放して子供を集める構想を田中君代



に説明し、他に一名協力者を得て、子供十名からのスタートでした。二年後、四月にグレイ夫妻は帰国することになり、熊本地方宣教師バツク師と私の母、田中君代にすべてを託して日本を離れました。同時に大家の事情で、近くの大江神社の隣に移ることになりました。

敷地は広く保育に適した環境でした。次第に園児も増え、正式な幼稚園の設立の願いが高まりました。建設資金は、グレイ師ご夫妻、米国人ルーテル教会婦人ミッションの寄付、内部設備の資金は母の会のバザー、他に市内の有志の寄付によって調達されて、敷地は新屋敷にあるバツク家の庭が提供されました。新しい園舎は、バツク師の母国デンマークの建築様式をとりました。道行く人びとの目を惹きました。

どりの幼稚園は（第二代園長バツク師）正式な形で発足しました。

1941年当時の日・米関係の悪化のため、宣教師も帰国を余儀なくされ、バツク師一家も例外なく国に帰ることになりました。第三代園長に田中君代が就きました。

世界大戦の勃発で、キリスト教関係の教育機関や施設など次第に厳しくなってきました。熊本市も1945年6月、大空襲で市内はすっかり焼け野原になりました。大江の家も焼失しました。多くの人は、夢も希望もなく意気消沈した状態でした。その中で、奇跡的に、みどり幼稚園は助かり、園舎は無傷で、外壁も門扉もそのまま残っていました。子ども達が防空壕の中で「神さま、幼稚園をまもってください」と小さい手を合わせていたことを聞いて、田中は一日も早く開園したいと決意し、5名ほどの園児から終戦後初めて再開しました。熊本教会も焼失のため、再建するまで、礼拝は園舎でまもり続けることが出来ました。

無事だった園児が戻って来たので、正式に幼児教育者を募集しその中に、故石橋恵子姉もおられます。後年、牧師夫人も3人、私も4年間ほど働きました。1951年、創立30周年記念

事業で保育室の増築、改修をしました。1953年の大水害で又復興の為に義援金また多くの方々のご厚意により大変力を頂きました。

1954年4月、宗教法人から学校法人九州学院に移り名称も「九州学院付属みどり幼稚園」となりました。九州学院70周年の時、記念事業として、学内に新築され、1982年に新屋敷から離れることになりました。80余年の歩みを簡単に記しましたが、苦難の度に神様の導きとお支えがあり感謝です。グレイ夫人の「子どもをキリストへ」の祈りによって、大きな木になったみどり幼稚園がいつまでも地域に喜ばれ、良い働きがなされることを心から祈ります。

「補足」 終戦前後のみどり幼稚園

1945年7月1日未明の熊本大空襲により、熊本教会の会堂が焼失した。幸いに新屋敷町388にあった「みどり幼稚園」は残ったので、熊本教会と大江教会の会員は次の日曜日から、そのところで礼拝を守ることにした。さらに古新屋敷の教師館は焼けてしまったので、田中寅雄一家はそこに住むことにな

り、牧師の石松量蔵は神水の慈愛園から通って礼拝を司った。

みどり幼稚園における礼拝は、当初は13名であったが、次第にその数を増し、1946年には百数十名に達した。また、宣教師の第一陣として来日したミラー、エカド両師の力により九州学院、九州女学院の生徒への伝道が積極的に展開され、多数集まるようになった。そこで、第二礼拝を日曜の午後、九州女学院のチャペルで行うことになった。この礼拝が室園教会の始まりとなった。1947年になっても、みどり幼稚園での礼拝出席は150名を下ることなく、一つの場所で収容出来ずに熊本市内に4つの集会がもたれた。さらに、1947年4月に至って、市内4つの集会、すなわちみどり幼稚園の集会を熊本教会とし、九州学院の集会を大江教会とし、九州女学院の集会を室園教会、それに慈愛園の集会を神水教会として、各々の教会に牧師の人事配置が行われた。

注：みどり幼稚園が最初に設置された「新屋敷町388」は、遡れば1902年から1904年まで熊本教会の仮会堂が置かれ、さらにその後、スタイワルト宣教師館となり、1909年9月からは最初の神学校が開設された所である。（青田）

九州学院百年史の編纂にあたって

九州学院創立百年史編纂委員長・熊本教会員 藤本 誠



九州学院全景（昭和初期）

来年（二〇二一年）九州学院創立百周年記念式典が行われる十一月に百周年記念誌を刊行するため、現在準備を進めているところだ。記念誌は『九州学院百年史 一九州学院とその時代』で、通史全体は不肖藤本が一人で執筆しています。単なる編年体の年史に止まらず、ルーテル教会が創設したキリスト教主義学校として、明治近代以降の日本の歴史の中でどのようにその百年の歩みを刻んできたのかを、資料や史実を基に可能な限り詳細に記しています。九州学院所蔵の初出資料や五高記念館の新資料、諸文献等を駆使し、九州学院の創立の精神を百年の歴史に明確に跡づけているつもりです。

通史は四編構成となっており、「第一編九州学院前史」は、学院創立までの熊本を視座にした明治近代キリスト教と教育の展開を概観し、九州学院が日本最初のルーセラ・ミッション・スクールとして創立された時代背景について論じています。執筆中につき未完ながら、『九州学院百年史』の目次概要（大部分省略表示）を次に記しておきます。

- 序章 日本唯一のルーセラ・スクールへの門
- 第一編 九州学院前史
 - 第一章 ルーテル教会の日本伝道
 - 第一節 南部一致シノツドの日本伝道開始
 - 第二節 新たな宣教師と伝道の展開
 - 第二章 明治期熊本の教育とキリスト教
 - 第一節 明治維新期の熊本とキリスト教
 - 第二節 明治期熊本の近代学校教育とキリスト教

- 第三章 ルーテル教会の熊本伝道開始期
 - 第一節 明治期熊本のキリスト教伝道と教会
 - 第二節 遠山参良と第五高等学校、花陵会
 - 第三節 路帖熊本教会とC・L・ブラウンの伝道
 - 第四節 ミッション・スクール創設準備と熊本高等予備学校
- 第四編 創設期から戦時下の時代
 - 第一章 九州学院創設期
 - 第一節 路帖神学校
 - 第二節 九州学院創設へ向けて
 - 第三節 九州学院の開校
 - 第四節 「認定」と「指定」の認可校へ
 - 第二章 九州学院確立期
 - 第一節 九州学院とルーテル教会伝道二〇周年
 - 第二節 九州学院の建学の精神と校訓
 - 第三節 初期教育活動と宗教教育の確立
 - 第四節 第一回卒業とブラウンの帰国
 - 第五節 九州学院神学部専門学校と九州学院財団法人の認可
 - 第六節 ブラウン帰国後の九州学院
 - 第七節 ミッション合同と九州学院教会設立、創立一〇周年



- 第八章 ブラウンの召天と記念礼拝堂
- 第九章 神学部東京移転と大正時代の九州学院
 - 第一〇節 創立二〇周年事業
 - 第一一節 遠山参良院長の召天
- 第三章 充実・動乱期
 - 第一節 第二代院長・稲富肇とキリスト教主義学校
 - 第二節 戦前の激動の中で
 - 第三節 戦後の再建へ向けて
- 第三編 戦後から現代の時代
 - 第一章 再建期
 - 第二章 発展期
 - 第三章 拡張期
 - 第四章 変革期
 - 第五章 新生期
 - 第六章 九州学院の新世纪へ向けて
- 第四編 付属施設史・資料

九州学院 ブラウン記念礼拝堂

青田 勇

1911(明治44)年に創設された九州学院はその当初より特別教室で礼拝が守られていたが、礼拝堂(チャペル)の実現への願いはブラウン、スタイワルト等の宣教師を通して、南部一致シノツドの海外伝道局に強く伝えられていた。しかし、その実現には、環境を取り巻く歴史的・経済的状况もあり、10年以上の歳月を要したのである。



で議長として臨んだブラウンは、『九州学院』の中で、チャペル建設の必要をつぎのようになに語っている。

「九州学院 土曜日帰宅しない寮の学生のために学院の一つの教室を開放して日曜日の朝礼拝がもたれている。水曜日の午後には院長と数人のクリスチャン教師により聖書研究会も開かれて、そこには生徒70名の内の約50名が出席している。木曜日と土曜日の午後は、私の宣教師館で個人的に二つのクラスがあり、生徒50名の内の約35名余りが出席している。これらの集会への出席は強制的なものではない。今年の春、洗礼を志願していた15名の内、8名が受洗をした。これが最初の伝道成果である。今の学には更なる成果が期待できると思う。」

このような結果を踏まえて、今後一層生徒に伝道していくためにはまず宗教教育の関する設備を整えることをしなければならぬ。特にチャペルの建設は何をおいても第一優先となる。チャペルそのものがないので、直接的及び間接的な面において色々の影響を受けている。現在に至るまで長年にわたって建築計画が検討されているが、今後は最終的な作業に向けて周到に準備すべきであり、ことに障害となるような無関心と形式的な

批判をかわすための忍耐と細心の注意が必要とされている。」(Joint Conference of Lutheran Mission, Fourth Annual Convention, 1913)

この議長報告でも示されているように、ブラウンはチャペル建設計画とその実現に強い期待を九州学院の設立当初から寄せていたことは明らかである。だが、第一大戦による物価・建築資材の高騰もあり、当初試算されていた建築総費用は二割以上も予算を超え、最終的には35,000ドルの資金が必要であることが判明する。そのため資金捻出の困難性から建築着工は結果的に延期せざるを得なかった。

しかしながら、歴史において働かれる神は、私たちの思いを超えて、新たな事態を切り開いてくださる。1921(大正10)年12月5日、合併症を伴う腸チフスにより、アフリカに西海岸のリベリアで客死したブラウンの死を覚えるための事業として、記念礼拝から一週間後の、1922年1月26日朝から開催されたボード会議は九州学院記念チャペルを3万5,000ドル(14,000ドルは確保されているが、21,000ドルは募金収入を予定)で建築することの決議を行い、建築着工開始の朗報が熊本に伝えられる。

それから三年後の1925(大正14)年2月から建築着工に漕ぎつけた念願のチャペルは1925(大正14)年10月30日に壮麗な姿を現した。その日の午前9時から挙行された献堂式には神学校長ネルセン、年会議長滝本、九州女学院院長エカード、教頭村上、三浦冢、本田伝喜、パウラス姉妹、それに遠来の宣教師と牧師、九州学院の全職員と生徒、熊本市内各教職・信徒多数が出席した。

九州学院の敷地の一角、160坪の敷地に総建築面積1200坪で建てられたチャペルは、堅固な鉄筋コンクリート構造によるロマネスク・スタイルであり、会衆席は1,000席の収容能力をもつ壮麗な建築物であった。建築の総工費は当時の日本円で8万6,756円であり、この資金のすべては当時の北米一致ルーテル教会からの支援であった。

さらに付け加えれば、このチャペルにはオルガンと鐘がアメリカのルーテル教会より贈呈されて備えられた。E・C・クロンクという一人の婦人の好意により、美しい音色を奏でるオルガンが太平洋を渡って船で送られてきた。また

毎日の学院内の礼拝と九州学院教会の聖日礼拝の時を知らせるための鐘は、サウスカロライナのルーテル教会の婦人会の人々(婦人会長M・O・クレップス)がニューヨーク州にあるメニリー・ベル会社に特注してアメリカから直接に送られ、1925(大正14)年6月27日の朝の学院の礼拝からその響が学院内に伝わった。

なお、チャペル屋内の左手正面の銅版には、創設者ブラウンの名前とその働きを覚える旧約聖書の言葉が刻まれている。「目覚めた人々は天空の光のように輝き、多くの者の救いとなった人々はとこしえに星と輝く。」(タニエル書12章3節)

